開催地名：北海道洞爺湖町	
開催日時	令和元年 11 月５日（火）　10：30 ～ 12：00
開催場所	虻田ふれ合いセンター
語り部	横山　幸雄　　（岩手県釜石市在住）
参加者	洞爺湖町民　約 150 名
開催経緯	当町では、平成 24 年６月に北海道防災会議地震専門委員会において公表された津波浸水予測図を基に、同年 10 月に洞爺湖町津波ハザードマップを作成、平成 25 年度からは毎年津波避難訓練を実施しているが、訓練参加者が伸び悩んでいる状況で、津波災害への防災意識が低い状況である。また、「自助・共助」の強化を図るため、自主防災組織の設立を推進し、設立に係る支援や設立後の活動支援を実施しているが、42 自治会のうち６自治会の設立にとどまっている状況である。今回東日本大震災の語り部をお招きし、実体験に基づいたお話を伺って、住民の防災意識の向上を図りたいと思う。
内容	（１）はじめに 東日本大震災から９年が経とうとしている。大変な地震・津波に今でも身震いしてしまうのは私だけではないと思う。このときの津波は、今まで経験のない大変大きなものであった。 地震発生時、私は岸壁から 15 メートルほどの場所に立つ釜石市海員会館の２階にいた。３分間ほど激しく、そして時に弱くを繰り返して断続的に揺れた。普通の揺れよりは大きいとは思いましたが、釜石湾の入り口には、世界に誇る、ギネスブックにも登録された、海面下 63 メートルから積み上げた岩石のマウント（土手）に、７階から８階の高さに該当するコンクリートブロックを乗せているので、大事はないだろうと安心していたと思う。 私は自宅に車で戻り、車を置いて避難所に向かおうと思っていた。とりあえず地区民生委員として、自力避難ができない隣のお宅に声をかけたところ、「助けて下さい」と連呼していた。119 番は殺到していて対応は不可能だったし、電話も不通でどこにも連絡が取れないので、周りの様子を見て誰か探してこようと外に出た。すると向こうから２階建ての建物の屋根より高い津波が向かってくるのが見えた。あわてて家に入り、２階にあがろうとしたが、水の勢いに押されて家の外に押し出された。水の中から顔を出し、無我夢中で電柱目指して泳ぎ、ようやく電柱にたどり着いた。電柱の上から、寒さと怖さに身震いしながら流されている家や車を見ていた記憶が残っている。 私が流されたのは第１波で、全部引かないうちに第２波が来たようである。ようやく津波が引いたので自宅まで戻ると、妻は２階にいて、部屋にあったテーブルの上にあがって何とか助かった。お隣のお宅も２階に避難していて無事だった。しかし玄関は瓦礫に埋もれていて、近づくことができず、そこに第３波が来

	て、今度は顎の下まで水につかった。しばらくして若者３人が救助に来てくれ、私と妻、隣の家の方々は避難所に入ることができた。全身ずぶぬれの私は、着替えをもらって下着からすべて着替えることができた。涙が出たのを覚えている。 （２）震災を振り返る 　今度の津波は、居住している住民にとっても思いもよらないことであった。群馬大学の片田先生は必ず来るであろうと言っていたが、私たちには到底信じられないものであった。今回の津波のあとで、津波の来たところを掘り返して調査してみたところ、7,000 年のあいだに 18 回も大津波が来た痕があるそうである。今回が初めてでは決してなかったのである。釜石には、完成後にギネスブックに登録された湾口防波堤があり、市民は安心していたが、全滅に近い被害を受けた。この防波堤の効果は、市内に押し寄せる津波を７分ほど遅らせるにとどまったようである。 　「津波でんでんこ」、「想定にとらわれるな」、「最善をつくせ」、「率先避難者たれ」、「少しでも高いところに逃げろ」等、2008 年以降の釜石市の教育方針のおかげで釜石の奇跡などと言われているが、決して奇跡ではない。先生の話を実践したに過ぎない。私も含め、住民の皆さんがその気になれば、人的被害は少なくできると思う。 　最後に、たくさんの方々からご支援をいただいたことに対し、この場をお借りして厚く御礼を申し上げたい。
開催地より	津波に流された語り部のお話から、津波の恐ろしさがひしひしと伝わってきた。町民の皆さんも、改めて津波の凄さ、怖さを認識できたと思う。